

ホームページに世界の大学戦略を見る

(25) 歴史的ブラックカレッジの意義と役割

アフリカ系アメリカ人のリーダーを養成

山田礼子 同志社大学教授

長い大統領選挙の戦いも終わり、新しい大統領が誕生した。オバマ氏が第44代大統領に選出されたことにより、アメリカ始まって以来の黒人大統領が誕生する。筆者の知り合いの多くのアメリカ人も、このことをヒストリック・モーメント(歴史的な瞬間)だと評している。ブッシュ政権時代に悪化した経済、外交、国際関係の改善への期待がオバマ新大統領に寄せられていると同時に、多くのアフリカ系アメリカ人を取り巻く状況の変化への期待も大きいという。

前号の連載では、アメリカのアクレディテーションにも地域基準協会の個性が反映されており、高等教育機関にも個性を生かすミッションとアウトカムが評価されていることを紹介した。そして、南部州を管轄するSACSの場合には、アフリカ系アメリカ人と白人との教育の分離という問題、あるいはアフリカ系アメリカ人が一般的に貧困という問題を克服することが重要課題として続いている。従って、教育の質の保証と学生への財政援助を通じての機会の提供がSACSにとっては不可欠な課題であることを提示した。それゆえ、特に教育の質の保証のためには、SACSが管轄する州には他の州とは異なり、黒人(以下アフリカ系アメリカ人)学生を主な対象としたHistorically(以下歴史的)ブラックカレッジが数多く存在する。

今回は、アメリカの高等教育機関における多文化主義を取り入れた教育プログラムの意義を示したあとに、アメリカのユニークな高等教育機関である歴史的ブラックカレッジを紹介する。

アメリカ高等教育機関における多文化主義

多様な人種・民族から構成されているアメリカにとって、9・11以降停滞しているという見方があるとはいえ、多文化主義が国家を統合していくための重要な概念であることは否定できない。したがって、多文化主義にもとづいた教育は初等教育から高等教育を通じて、すべての階級、階層、人種、民族、ジェンダー、文化的背景の児童、生徒、学生に平等な教育の機会を保障するための概念であると同時に、教育改革運動であり、そしてその過程そのものとして受け止められている。より具体的に見れば、第一に低所得者層、人種・民族的少数派、女子生徒、障害を持つ生徒の声、経験などをカリキュラムに組み込むというカリキュラム改革であり、第二にこれらの集団に属する生徒の学力達成に向けての支援、第三にこれらの集団に属する生徒の間の教育を普遍化するというに置き換えられる。

1960年代の公民権運動以降、アフリカ系アメリカ人は差別の撤廃を求めようになったが、当時の目標は公共の施設、住居、雇用そして教育の領域に存在する差別の改善にあった。アメリカに限らず、多様な民族・人種から成り立つ国家においては、国民統合をいかに実施するかということは大きな国家的課題である。アメリカにおいては、その国民統合のひとつの象徴が「アメリカ化教育」であったことは疑いがない。その際、アフリカ系アメリカ人に注目してみれば、彼らは可視、不可視の様々な「隔離制度」(segregation)によって実質的には国民統合から排除さ

れ、貧困のなかに閉じ込められていた。とりわけ、南部においては「隔離制度」は根強く、公民権運動以降に差別撤廃が制度化されたとしても、実際には隔離状況が消失したわけではなく、現在でもまだ白人とアフリカ系アメリカ人との間の格差は大きい。それがSACSのアクレディテーションの基準にも反映されているというわけだ。

「アメリカ化教育」に象徴されるように、50年代の統合の根底にあったコンセプトは、ホワイト・アングロサクソン・プロテスタントいわゆるワスプの主流文化の存在を前提とし、それへの同調、同化が統合の達成にあったのが、そうしたワスプの持つ主流文化への同化に対する痛烈な意義申し立てが公民権運動およびその後の多文化主義へのつながりであったといえる。公民権運動は、その後アフリカ系アメリカ人だけでなく、ネイティブ・アメリカンやヒスパニック、プエルトリコ系、アジア系などの人種・民族的少数派にも波及していった。

しかし、メリトクラシー(業績主義)が象徴としてとらえられているアメリカにおいても、実際にはメリトクラシーは人種・民族的少数派、女性などのマイノリティには機能しにくい。マイノリティが上昇移動するためには、特に、高等教育はカギとなる。従って、アフーマティブ・アクション(少数者差別撤廃措置)が高等教育にも適用されたことが、社会的少数者の進学率の向上という成果につながり、構造的な同化の一步となってきた。

現在、多くの高等教育機関においては、1960年代以降の公民権運動の広がり、その後の1970年代から80年代にかけての文化的多元主義の登場と80年代後半以降の多文化主義の浸透により、多くの大学の一般教育の見直しの流れのなかで西洋中心の歴史教育の改革が行われた。具体的には、アフリカ系アメリカ人の歴史や研究、ヒスパニック、アジア系の歴史や研究などが、一般教育および学問分野として教育課程やプログラムに構築された。同様に、女性学(Women's Studies)についても、女子大から始まって、現在では女子大だけでなく多くの大学で、女性学研究としてWomen's Studiesプログラムが設置されている。これらは多文化主義教育・研究プログラムの事例である。

歴史的ブラックカレッジとは

そうしたプログラムの理念や目標を大学の使命そのも

のとして掲げているのが歴史的ブラックカレッジである。現在、アメリカには歴史的ブラックカレッジはマイノリティへの教育機会の提供を大学の特徴とする教育機関として認知されており、特に1964年以前にはアフリカ系アメリカ人のみを対象として高等教育を提供していた機関であった。というのも、1964年以前には白人を対象とするアメリカの高等教育機関にはアフリカ系アメリカ人の入学は許可されていなかったからである。現在でも100以上のHistoricallyブラックカレッジが存在しているが、その多くは南部と東部の州に集中している。

特に南部においては人種による分離が法的にも認められていたため、アフリカ系アメリカ人が高等教育を受ける機会はきわめて限られていた。そのため、アフリカ系アメリカ人へのより高度な教育の機会の提供を目的として設立されたのがブラックカレッジであったということである。

ほとんどのブラックカレッジは、南北戦争後に設置されている。1854年に設立されたペンシルバニアにあるリンコリン大学と1856年に設立されたウィルバーフォース大学が、南北戦争以前にアフリカ系アメリカ人の教育水準の向上を目指して設置された唯一のブラックカレッジであったといわれている。

1964年の最高裁によるブラウン判決の決定により、教育に関する人種統合が連邦の教育政策の基本となり、その後の1965年の高等教育法でもこの判決を基本として高等教育機関でのマイノリティ学生の受け入れを実質化した。それにより、ブラックカレッジは他の人種を受け入れるようになったことから、歴史的ブラックカレッジと呼ばれるわけである。実際、かつてはブラックカレッジとして設立されたにもかかわらず、現在では白人学生が大多数を占めているケースもある。

歴史的ブラックカレッジは州立大学と私立大学の両方があるが、州立の歴史的ブラックカレッジは他の州立大学よりも比較的学費が安く抑えられていることも特徴の一つである。アフリカンアメリカンの歴史や文化も学ぶことができる歴史的ブラックカレッジは、すべての学生に門戸を開く今日でも、独自のプログラム、教育方針を打ち出していることで知られているといえる。そこで、歴史的ブラックカレッジのなかでも、歴史も伝統もそして質も高いという評価を受けている男子校であるモアハウス・カレッジを見ていこう。

アフリカ系アメリカ人男性のための大学

リーダーシップを育成

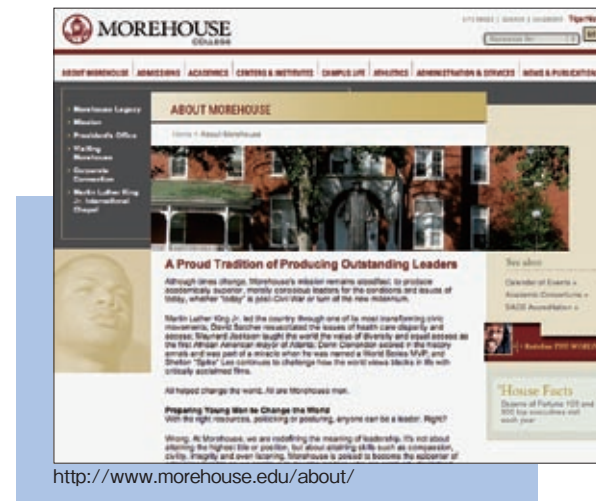
モアハウス・カレッジは、ジョージア州アトランタにある歴史的ブラックカレッジであり、アフリカ系アメリカ人のハーバード大学とも呼ばれることの多い男子校である。モアハウス・カレッジを卒業した著名人は数多い。例えば、最高裁の判事として長く活躍したマーシャル判事、マーチン・ルーサー・キング牧師、映画監督であるスパイク・リー、俳優のサミュエル・ジャクソン等が卒業生であるが、こうした卒業生はいずれも強いアフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティを持ち、彼らを取り巻く社会や環境を変革するために活躍してきた。このような特徴が実は後述するモアハウス・カレッジのミッションそのものとなっている。

2003年データをもとにすると、おおよその学生数は2900人前後であり、学費は11000ドル程度となっている。学生の95%以上がアフリカ系アメリカ人である。残りの5%はおそらくアフリカ系の留学生が主な構成者となっている。

<http://www.morehouse.edu/about/>

モアハウス・カレッジは、1867年にアフリカ系アメリカ人牧師と教師の養成を目的として設立されたバプティスト教会付属のオウガスタ・インスティテュートが基盤となっている。アフリカ系アメリカ人にとって、信仰を持つことは、最も重要な生活の一部であり、特にバプティスト教会がアフリカ系アメリカ人の心の糧ともなっている。オウガスタ・インスティテュートが設立されたのは、スプリングフィールド・バプティスト教会と呼ばれるアメリカでは最も古いアフリカ系アメリカ人のための教会であった。現在でも、モアハウス・カレッジのキャンパスにはマーチン・ルーサー・キング記念教会があり、信仰は学生にとって切り離せない学生生活の一部となっている。

この大学の特徴の一つは、大学のミッションとしてアフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティを強く持ち、高い知性とリーダーシップを備えたアフリカ系アメリカ人男性を育成することを掲げていることにある。ホームページにも「Preparing Young Men to Change the



World」という文章が示されているように、「Change the World」という強い志を持つことも教育の成果の一つとなっている。新大統領であるオバマ氏はモアハウス・カレッジの出身ではないが、大統領選を通じてのキーワード「change」はまさにモアハウス・カレッジのミッションとも重なっているだけでなく、彼の政治家としてのキャリアの一部としての過去の活動も、モアハウス・カレッジが重要視しているリーダーシップの育成の一つであるボランティア活動と重なっていることが興味深い。

リーダーシップとはモアハウス・カレッジの定義によると、「出世をする、あるいは高い地位を獲得することではなく、高い知性と志を持ち、モラルを備え、人をひきつけ、引っ張っていくことができる」ということになる。こうしたリーダーシップは、リーダーシップ関係の大学での授業のみならずアフリカ系アメリカ人のコミュニティにおけるボランティア活動という経験と、アメリカ以外の国を旅するあるいは外国で学ぶという経験を通じて醸成されるという考えから、モアハウス・カレッジでは、サービスマニッシュやスタディ・アブロード・プログラムも教育プログラムの一環として導入されている。実際に、多くの学生がコミュニティ・サービスやスタディ・アブロード・プログラムに参加している。

3つの領域によるリベラルアーツ

モアハウス・カレッジはビジネスと経済、人文学と社会科学、科学と数学という3つの領域を基本とする私立のリベラルアーツ大学として、バランスのとれたリベラル

アーツ科目をそろえているが、アフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティの形成を目指して、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化についての教育もカリキュラムを構成するうえで不可欠な要素となっている。具体的な教育目標もしくは到達目標として、

- ・ 口頭および文章上でのコミュニケーション能力を育成し、分析的、批判的思考能力および人間関係構築力を育成する。
- ・ 世界の文化、芸術および創造的な文化を理解し、慈しむ力を養う。
- ・ 高度専門職業に従事し、あるいは大学院での学習・研究に不可欠な知識や技能の基盤となる力を育成する。
- ・ 自信、寛容性、モラル、倫理性、精神性、国際性、社会正義へのコミットメントといったアトリビュートを涵養する。

が挙げられている。

確固としたアフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティの形成を築くための一連の関連科目を総称してブラックネス・プログラムと呼ばれている。ブラックネス・プログラムとは、アフリカ系アメリカ人とはいかなる存在であるのか、彼らに特有の歴史や文化を学び、アフリカ系アメリカ人としての強いアイデンティティとセルフエスティーム（自尊心）を形成するためのプログラムである。例えば、アフリカ系アメリカ人の代表的大衆音楽であるヒップホップは、ブラックネスという視点にもとづく歴史を反映した創造的文化の一つとして位置づけられる。若者にとって親しみやすい身近な文化からブラックネスを学ぶこともできるわけだ。

さて、モアハウス・カレッジのユニークな教育の一つにリーダーシップ・スタディ・プログラムがある。日本の大学においてもリーダーシップの育成は近年、企業等から高等教育機関で大学時代に養成されるべき技能として求められつつある。しかし、なかなかカリキュラム上でのどのような科目を構成するか、具体的にどのような教育方法で育成するかということについてはブラックボックス状態であり、むしろ、クラブ・サークル等の正課外学習でリーダーシップを身につけることができると回答する学生も多いぐらいだ。

リーダーシッププログラム

それではどのような科目を通じてリーダーシップの育成が設計されているのかを見てみよう。リーダーシップ・スタディ・プログラムは学際的なプログラムとしてカリキュラム上位置づけられており、一連の科目の単位をすべて履修すると、学生は副専攻（マイナー）の修得が認定されることになる。1年次あるいは2年次までに5科目を履修することがその条件である。必修科目は、次の3科目、① HLs 101, Foundations of Leadership, ② HLS201, History and Theories of Leadership, ③ 301, Ethical Leadership and African American Moral Traditions (capstone course) から構成されている。副専攻を取得するためには、この必修3科目に加えて、2科目を学際的な科目群から選択科目として履修し、総計15単位を修得しなければならない。

リーダーシップ科目群からなるプログラムを終了することで、学生はリーダーシップについての知識や国内および国際的視野にもとづいてリーダーシップのあり方を批判的に検討することができるだけでなく、かつそうした技能を発揮することができるようになるということだ。また、アフリカ系アメリカ人の生活と文化に根ざし、かつ価値観にもとづいたリーダーシップは何かということを考えて、実践、協働ができることが到達目標として掲げられている。

日本では、ブラックカレッジの存在はほとんど知られていないし、ブラックカレッジでの教育プログラムの目標や実際の成果についての情報は皆無といってもよいぐらいだ。今年の大統領選挙の期間あるいはオバマ氏が新大統領に選ばれて以降、日本でもオバマ氏のルーツはアフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティということが盛んに報道されるようになった。現実のアメリカではいまだにアフリカ系アメリカ人を取り巻く環境は厳しく、白人との間の格差も大きい。しかし、ブラックカレッジでの教育を通じて、多方面で活躍しているアフリカ系アメリカ人も多い。多文化主義自体を具現化しているユニークな存在であるブラックカレッジを知ることで、多文化とは何かを考える機会になればと願っている。